

# サハ（ヤクート）音楽の論考にみる作曲家マルク・ジルコフ

山下正美

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科  
『人間文化創成科学論叢』第15巻（2012年）  
2013年3月発行 抜刷

## サハ（ヤクート）音楽の論考にみる作曲家マルク・ジルコフ

山下正美\*

### Composer M. N. Zhirkov in the context of Sakha music study

YAMASHITA Masami

#### Abstract

This paper focuses on Mark Nikolaevich ZHIRKOV (1892-1951), who is considered to have been the first professional Sakha composer in the Sakha Republic of the Russian Federation. Native Sakha musicologist G. G. Alekseeva said of “*Nurugun Bootur* – the first Sakha national opera, composed by M. N. Zhirkov with G. I. Litinskii – that professional music in Sakha was established when the opera was first performed at Iakutsk in 1947. Zhirkov also researched Sakha folk music in the 1940s, chiefly to collect material for his compositions; his findings were presented in *Iakutskaiia narodnaia muzyka* (Iakut folk music), which today serves as basic literature for musicians and folk music scholars.

This discussion illuminates Zhirkov’s career in Iakutiia and, taking account of the situation in the first half of the twentieth century, considers the context and process which led to Zhirkov becoming “the first professional Sakha composer” after professional music culture was established by the Soviet government.

Keywords: Russian-Soviet music, history of Sakha (Iakut) music, folk music, M. N. Zhirkov, Sakha composer

#### はじめに

マルク・ニコラエヴィチ・ジルコフ Mark Nikolaevich ZHIRKOV (1892-1951) は、現在のロシア連邦サハ共和国（ヤクーチア）ヴィリュイスク市で生まれ育った作曲家で、サハ音楽史の基礎文献中では「初めてのヤクートの専門的作曲家 *pervyi professional’nyi iakutskii kompozitor*<sup>1</sup>」（GOLOVNEVA 1991: 10）として位置づけられている。ジルコフの名は、首都ヤクーツク市中心部にある音楽専門学校にも残されており、サハ共和国では彼が後世に名を残した人物として評価を得ていることが窺える。また、この学校の卒業生で、のちに校長も務めたサハの音楽学者ガリーナ・グリゴリーエヴナ・アレクセーヴァ Galina Grigor’evna ALEKSEEVA (1944-2008) は、1981年にグリーンカ記念ノヴォシビルスク音楽院の大学院に入学し、1989年には『ヤクートの専門的音楽文化創設におけるM. N. ジルコフの役割 *Roľ M. N. Zhirkova v stanovlenii iakutskoi professional’noi muzykal’noi kul’tury*』という論文で準博士（kandidat）の学位を得ている（PAVLOVA 2006: 53-54）。

ではジルコフとは、いったい何をした人物なのか。彼は第一義的には作曲家として認識されているが<sup>2</sup>、その活動領域は多岐にわたっている。初期はアマチュアの、のちにはプロの合唱団や民俗楽器オーケストラの指揮者、指導者、組織者として、またサハ民俗音楽の採集者・研究者としての顔も持ち合わせていた。筆者がジルコフを知るようになったのは、ジルコフの民俗音楽学者としての業績『ヤクート民俗音楽 *Iakutskaiia narodnaia*

---

キーワード：ロシア・ソヴィエト音楽、サハ（ヤクート）音楽史、民俗音楽、M. N. ジルコフ、サハの作曲家

\*平成20年度生 比較社会文化学専攻

*muzyka*』(ZHIRKOV 1981)を参照するよう、サハの音楽家や研究者たちに薦められたからだった。実際、筆者の観察する限り、サハ民族音楽研究を含むロシアの諸文献では、ジルコフの『ヤクート民俗音楽』が必ず参考文献に含まれていた。

ロシアの作曲家というと同代人にはI. ストラヴィンスキー(1882-1971)や、S. プロコフィエフ(1891-1953)、D. ショスタコーヴィチ(1906-75)らがいる。しかし、彼らの登場するロシア音楽史の中に、ジルコフの名を見出すことはできず、日本でもほとんど知られていない。サハ共和国内でジルコフが作曲家として、また民俗音楽の研究者として一定の評価を与えられていることは、むしろロシア音楽史や西洋音楽史といった文脈からではなく、ジルコフを評価するサハ音楽史独特の文脈というものが、その文脈から理解されるべきものであることを示唆している。

そこで本稿では、サハ音楽史の論考を読み解きながらジルコフの生い立ちや経歴を明らかにするとともに、そのジルコフが「初めてのヤクートの専門的作曲家」として記述されていく背景について考察する。そして、このことが「自治共和国」から「共和国」への格上げを目指し、自治権の拡大を目指したサハの政治的背景とも合致していたことを明らかにし、旧ソヴィエト諸民族の音楽史を理解するための一助としたい。

## 1. ジルコフの生い立ちと経歴

M. N. ジルコフは、1892年ヴィリユイスク市で、コサックの家庭に生まれた。当時のヴィリユイスクは人口の少ない小さな市で、サハ、エヴェンキなどの様々な民族412世帯が複雑に混ざり合って暮らしていた(ALEKSEEVA 1994: 10)。ヴィリユイ地域は、スタール郡、ニェルバ郡、ベルフネヴィリユイ郡、ヴィリユイ郡の4つから成る。ロシア革命前のヴィリユイ郡ヴィリユイスク市は、ヴィリユイ地域の中心地であり、行政機関や政治活動の拠点となっていた。住民は、サハ化されたロシア人<sup>3</sup>、コサック、流刑移民などから構成された<sup>4</sup>(UTKIN 1993: 5)。

ジルコフの父ニコライは、ロシア人のコサックとサハ人との間に生まれた混血児で、家庭ではサハ語を話していた。ニコライは、漁・狩猟・大工も行う多才な人物で、サハ民謡のトユクを能くし、オフオカイの愛好者でもあった。ジルコフ家には、隣の郷に住む親戚やエヴェンキが、物資のためによく立ち寄ることがあり、著名なオロンホスト(英雄叙事詩オロンホの歌い手)もしばしば訪れた。ジルコフは子どもの時分からヴィリユイのオロンホを存分に聞くことができた(ALEKSEEVA 1994: 13-14)。

また、ヴィリユイは政治犯流刑囚が多く滞在した土地でもあった。ヴィリユイ監獄で流刑に処されていたのは、まずデカブリスト、1867-68年のポーランド蜂起参加者、ナロードニキ、革命的労働者らで、1901年には3540人もの流刑囚がいたとされる(木村 2001: 74)。彼らの中には、現地語を学び、のちにサハの民族学的調査に加わるようになった者もあり、1920~30年代に活躍したサハ知識人たちにも影響を与えた(高倉 2004)。

ジルコフもまた、政治犯流刑囚と近い関係にあった。ジルコフ家は古いコサックの一族で、政治犯流刑囚の生活をさまざまに支援していた。1872-73年には、ヤクーチア最初の政治犯流刑囚P. F. ニコラエフが、ジルコフの祖父の家に住んでいた。そこでニコラエフは、サハの子どもたちに読み書きを教えており、ジルコフの父親もニコラエフから読み書きを習った(ALEKSEEVA 1994: 13)。1897年、サハの識字率は0.7%と極めて低く<sup>5</sup>、ロシア語の読み書き能力を持ったジルコフの父親は、1892-1902年ヴィリユイのコサックの学校で教師や異族人公署書記としても働いた。コサックの小学校でロシア語の読み書きを習ったジルコフも、移住コサックの勤労義務として、のちヴィリユイ郡管理局で書記、学校の教師といった父と同様の職に就いている(ALEKSEEVA: 1994 13, 20)。

ジルコフの家庭では、家庭でのコンサートやダンスも頻繁に行われ、その客人にも政治犯流刑囚が含まれていた。そこでは両親が知っていたロシア語やサハ語の民謡のほか、《ラ・マルセイエーズ》《ポーランド革命歌》《赤旗》などの革命歌も演奏された(ALEKSEEVA 1994: 15)。こうしたレパートリーもまた、政治犯流刑囚によって、サハにもたらされたもののひとつだった。

ジルコフは、1907年のヤクーツク高等学校時代に、ガルモーニ(ボタン式アコーディオン)、バラライカ、マンドリン、ギター、ツィター、ドムラなどを演奏し始める。高等学校での勉学期間に、音楽の基礎を習い、五

線譜の読み書きを習った。ヴァイオリンを耳で聞いて演奏するだけでなく、楽譜を読んで演奏するようになった。1909年には、アマチュアの弦楽アンサンブルや合唱団の組織者としても能力を発揮し、ヴィリュイツ子や政治犯流刑囚と小さな弦楽アンサンブルを結成する。これはサハで初めての弦楽アンサンブルであった(ALEKSEEVA 1994: 18-19)。

1915-17年、ジルコフは再びヴィリュイ郡管理局へ書記として勤務し、そこで1917年のロシア革命を迎える。その後1933年まで幾度の配置換えを経ながら、ジルコフはもっぱらヴィリュイの役人として過ごしている(ALEKSEEVA 1994: 20)。その間も、1920年に設置された民衆の家narodnyi dom<sup>6</sup>で合唱団やオーケストラのサークルを指導し、1922年には、赤軍合唱団を結成するなど、音楽集団を組織する活動は続けられた(ALEKSEEVA 1994: 25-26)。

### ジルコフ略歴 (筆者作成)

1892	M.N. ジルコフ、コサックの家庭に生まれる
1898-1902	ヴィリュイスクのコサック小学校に通う
1903-05	コサック小学校を卒業し、ヤクーツクの実科中学校に入学
1906	病気のためヴィリュイの両親のもとへもどり、療養する
1907	ヤクーツク高等学校に入学
1909	ヴィリュイ出身者や政治犯流刑囚らと小規模な弦楽アンサンブルを結成
1910-12	ヤクーツク高等学校を卒業後、ヴィリュイ郡管理局で書記となる
1912-14	ヴィリュイ高等小学校で歌の教師を務める
1915-17	再びヴィリュイ郡管理局書記を務める
1917-33	ヴィリュイ郡社会安全委員会書記、地方局秘書などを歴任する 1920年ヴィリュイに民族の家が設置され、その責任者となったジルコフは、合唱団やオーケストラのサークル活動を指導する
1933-36	モスクワ音楽院に派遣され、ドゥボフスキーの作曲クラスで学ぶ
1936	ルナチャールスキー記念国立演劇研究所の芸術家集団を中心に合唱団を組織しモスクワのソ連友好民族の夕べに出演、成功をおさめる サハに帰郷し、サハ国立劇場の音楽課主任となる (~40) その間、国立劇場付属合唱団を組織する
1940	サハ国立合唱団を母体にバレエ・声楽・オーケストラ部門から成る3年間の音楽養成所が設置され、芸術監督に就任する (~47) 交響オーケストラを組織する 音楽劇《ニユルグン・ポートル》上演で音楽を担当する
1943	レーニンスク、スタール、ヴィリュイスク民俗調査を組織
1944	レパートリー創出のためにモスクワ、スヴェルドロフスク(現エカテリンブルグ)への出張班を組織する 子ども音楽舞踊学校の設立に携わる
1947	民族オペラ《ニユルグン・ポートル》初演 ソヴィエト科学アカデミー・ヤクーツク支部言語・文学・歴史・芸術学研究所の芸術学部で、サハ民俗音楽研究に従事する
1949	サハ音楽芸術舞踊専門学校の設立に携わる
1950	アムギンスク、ウスチ・アルダンスクへ民俗調査を組織
1951	ジルコフ、没

## 2. ロシア革命後のサハ音楽史

1917年のロシア革命は、サハ音楽史の中でもとりわけ大きな出来事として記述されている。そこでは、「ロシア革命前のヤクーチアにあったのは、民俗音楽のみであり、専門的音楽の浸透は個人的なもの、あるいは愛好家のためのもの」でしかなく、「ヤクーチアの専門的音楽文化の全システムは、もっぱらソヴィエト時代に確立された」（GOLOVNEVA 1991:40- 41）とされている。革命を境にサハ音楽史は大きく二つに分けられ、革命後のサハ音楽史は、次の3段階、すなわち第1期1917-36年、第2期1936-56、第3期1956-87年に区分されている。

第1段階（1917-36年）は、社会主義建設下で、サハ音楽のプロフェッショナルリズム形成への発展が確保され、基本的な組織的問題が解決された時期とされている。その主だった出来事は、1925年に国立劇場が設置されたこと、ヤクーチア諸民族の音楽作品を研究する中心地としてヤクート自治共和国人民委員会に言語・文化研究所が設置されたこと、民謡集の出版（1927、1934、1936）、音楽集団を養成するための音楽養成所の設置（1921）、A. スクリャピンによる合唱団やデズ・シモンによるオーケストラ、M. N. ジルコフの弦楽オーケストラの組織、1929年のラジオ放送開始などである（ALEKSEEVA 1994: 5）。

第2段階（1936-56年）は、ヤクート自治共和国に芸術省が設置された1936年から、フルシチョフによってスターリン批判の行われた1956年までである。1933年からヤクーチア政府によってモスクワ音楽院へ派遣されていたジルコフは、ドゥボフスキーの作曲クラスで3年間学んだのち、第2段階のはじめの年、すなわち1936年にサハに帰郷する。それと同時にサハ国立劇場の音楽課主任に就任したジルコフは、国立劇場に付属合唱団を設立する。これを機に、愛好家を中心とした音楽家集団の組織活動は、国家的事業と結びついた専門的な音楽家集団の組織・養成へと転換する。モスクワ音楽院で、専門的作曲の教育を受けたジルコフは、サハの劇場音楽のその後の発展においてヤクーチア最前線で活躍することを期待されていたのである（ALEKSEEVA 1994: 29）。

## 3. サハ・オペラと「ヤクートの」作曲家ジルコフ

サハ国立劇場の音楽課主任時代のジルコフは、合唱団やオーケストラを組織するとともに、そのレパートリー創出のためにサハ民謡やサハの楽器といった民俗音楽の研究にも着手した。ジルコフは「1938年から39年に、初めてのヤクート音楽劇（のちのオペラ）の基礎を築くために、オロンホ《ニユルグン・ポートル》のヂエレティー様式の旋律を採譜し始めた」と述べている（ZHIRKOV 1981: 32）。ここから民謡収集の目的は、民謡の旋律をオペラ作曲の素材とするためであったことが読み取れる。合唱団やオーケストラの組織といった活動もまた、サハの民族オペラを作曲し上演するという目的を達成するために必要なことだったのである。

1947年に初演されたオペラ《ニユルグン・ポートル》は、ジルコフとG. I. リチンスキー LITINSKII<sup>7</sup>との共作による、初めてのサハ語オペラで、サハの英雄叙事詩オロンホを題材にしたものだった。アレクセーヴァはこの上演を以て「ヤクート専門的音楽の誕生」との見解を示している（ALEKSEEVA 1994: 6）。そして、その生みの親であるジルコフは、「初めてのヤクートの専門的作曲家」として評価されることになるのである。

ただし、ここで用いられる「ヤクートの」という形容詞については一考しておきたい。本稿で見てきたように、ジルコフは、父方にサハ人の血が入ってはいるものの、コサックの家庭に生まれ、コサックのための学校でロシア語の読み書きを習い、ロシアとサハ両方の文化を吸収した人物であった。ところがサハ人との会話中でも、「ジルコフはサハ人なのか、ロシア人なのか」と尋ねると、「ジルコフはサハ人だ」という者と「ロシア人とサハ人の半分だ」などという者が混在したのである。

ALEKSEEVA（1994: 13）の情報にしたがえば、父方にサハ人の血が入ったロシア人コサックということになるだろうが、当のアレクセーヴァも別の箇所ではジルコフのことを「ヤクートの」作曲家として記述している。つまり、「父方にサハ人の血が入ったロシア人コサックで、ヴィリュイスクで生まれ育ったサハの作曲家」といったまわりくどい表現は用いずに、一貫してジルコフを「ヤクートの」作曲家として記述しているのである。ここには、どのような背景があるのだろうか。

## 4. ソヴィエト時代のヒエラルキー

## 4-1 自治共和国から共和国へ

ジルコフがサハの作曲家として記述された背景には、入植してきたロシア人との関係史も考慮しなければならない。サハが帝政ロシアに組み込まれたのは、毛皮を求めて移住してきたロシア人たちがヤクーツクに要塞を築いた1632年とされており、それ以後現在も続くロシア人との共生は2012年で380年におよぶ。サハ共和国は年間の気温差が90度近くなる気候条件の厳しい土地であるが、この地に住むクロテン・キツネ・リスなどの毛皮、



写真1 サハ共和国国立オペラ・バレエ劇場  
(2007年4月27日、筆者撮影)

ダイヤモンド・金・天然ガスなどの豊富な地下資源は、人々を（特にロシア人を）ひきつけてきた。1920年代には、相次いで金鉱が発見され、多くの労働者を動員し、採掘が進められた。ソヴィエト期のロシア人労働者の流入によって、ヤクーチアにおけるサハ人の割合は82%（1926年）、57%（1939年）、46%（1959年）と推移し、1989年には33%にまで落ち込み、ロシア人が半数を占めるようになった（木村 2001: 72-73）。

こうした状況下、サハ人は「長いあいだ共和国領内でどれほどのダイヤモンドが採掘され、それがいくらするのかさえ知らなかった」という（ニコラエフ 1994: 20-24）。のちにサハ共和国の初代大統領となったミハイル・ニコラエフが掲げた選挙公約の基本テーゼは、サハの「経済的自主性を確保すること」「ヤクート国民が自分たちの生み出す福利を完全に享受できる状態を達成すること」であった。

ニコラエフは1991年9月、金とダイヤモンドをソ連邦の国庫に納めることを停止し、当時のエリツィン大統領に働きかけ、それらをサハ共和国の国庫に入れるための措置をとらせた（ニコラエフ 1994: 64）その後、旧ソ連時代「自治共和国」に過ぎなかったサハ共和国は、1992年に自称のサハを用い、主権国家としての地位を手に入れた（ニコラエフ 1994: 102）。

このヤクート自治共和国からサハ共和国への移行は、「自治共和国」からワンランク上の「共和国」への格上げを意味している。ソヴィエト時代、連邦には共和国、自治共和国、自治州、民族管区というヒエラルキーがあった。そして「共和国」になるためには、オペラ劇場とそこで上演すべき、しかるべき規模と構成をもったレパートリーを1930年代の終わりまでに建設しなければならない、という上からの要請があったのである（FROLOVA-WALKER 1998: 335; 浅村2003）。

## 4-2 音楽劇場からオペラ・バレエ劇場へ

オペラを上演するためには、まずオペラを上演できる劇場を建設する必要があり、指揮者、ソリスト、合唱団、オーケストラを構成する音楽家たちの確保、そこでレパートリーとなる民族オペラ作品が作曲されていなくてはならない。そして民族オペラの作曲のためには、その素材とすべきサハ民俗音楽の採集・研究も必要とされたのである。さらに脚本家や舞踊家・振付師、舞台美術、衣装担当者など、オペラの上演には多くの時間、資金、労力が必要とされる。これらを共和国内で用意し、オペラという上演形態を達成できるか否かは、国力を試す指標ともなっていたのである。

浅村（2003）は、ウズベク国立音楽劇場が1948年オペラ・バレエ劇場と改称し、その後、1959年に「アカデミー劇場」、1966年にはソヴィエト連邦内に4つしかない「ポリショイ劇場」の称号が与えられ、そこで上演される演目も民族的な音楽劇から西欧のオペラ・バレエへと変遷していく過程を明らかにしている。ここからは、劇場にも「音楽劇場」「オペラ・バレエ劇場」といったヒエラルキーのあることがわかる。

サハ共和国国立オペラ・バレエ劇場の公式webサイトでは「サハ共和国 D. K. シヴツェフースオルン・オモローン記念国立オペラ・バレエ劇場—本劇場はこのような地位（status）にある極東連邦管区における唯一の

劇場で、シベリアにおける4つのオペラ・バレエ劇場のひとつである」と紹介されている<sup>8</sup>。サハでは、ここが1971年から音楽劇場となり、1991年にオペラ・バレエ劇場の地位を授けられ、2001年からはオモッローンの名前を冠すようになった<sup>9</sup>。2007年4月27日「サハ共和国の日」（1922年4月27日にヤクート自治共和国が創設された）は祝日となり、劇場の外にはロシアとサハの国旗が掲げられ、劇場前の広場では来賓の挨拶や民族衣装を着た人々が歌や踊りを披露する式典が催されていた。2011年に国際口琴大会が開催された時も、646席あるオペラ・バレエ劇場が主たる会場となり、ここはサハのステータス・シンボルとしても機能していたと考えられる。

## 5. サハ音楽史の文脈

「金とダイヤモンドをサハ共和国に」（ニコラエフ1994: 64）といった主張に代表されるサハの自治権の拡大を達成するための政治的攻防は、音楽の分野にも影響した。M. N. ジルコフの音楽活動も、国家的事業と密接に結びつきながら展開されていったし、そのジルコフを「ヤクートの」作曲家として位置づけていくアレクセーヴァの研究にも、このような背景がにじみ出ている。アレクセーヴァは、サハと他の共和国とを差別化しながら、次のように述べている。

専門的音楽文化建設の諸段階において、ロシア人の音楽芸術家が決定的な役割を果たした他の共和国（カザフ共和国、キルギス、ブリヤート、トゥヴァ）とは異なり、1950年代初頭まで、M. N. ジルコフは、ヤクーチアにおける唯一の作曲家で、彼の死後1953年になってはじめて、モスクワ音楽院を卒業したG. A. グレゴリアンがやって来た（ALEKSEEVA 1994: 6）。

この記述からは、ジルコフがサハ人側に強く引き寄せられたニュアンスを読み取ることができる。他の共和国では「ロシア人の音楽芸術家が専門的音楽文化の建設に決定的な役割を果たした」と断言してよいのかどうか、その真意はひとまずおくとして、注目したいのはサハの場合、ヴィリュイスク出身のサハの作曲家M. N. ジルコフがこれに重要な役割を果たしたのだ、とALEKSEEVAが主張している点である。

先に述べたように、ソヴィエト音楽文化の発展における諸段階において、音楽家の養成、劇場の建設、レパートリーの創出といった必要条件を自前で調えることができるかどうかは、国力を示す指標にもなった。サハでは自治共和国から共和国へといった自治権獲得のための政治的攻防が、ロシア人との共生以来つねに繰り返されてきた。ソヴィエト音楽文化建設の時代において、サハは他の共和国のように、中央からやってきたロシア人音楽家によってではなく、「ヤクートの」作曲家によって専門的音楽文化が建設されたのだと主張することは、サハが「共和国」としての資格を持つ民族であるということをも、暗に示している。ジルコフを、「初めてのヤクートの専門的作曲家」として記述していく背景には、こうした自治共和国から共和国への格上げを目指す政治的な方向性も関与していたと考えられる。

## おわりに

本稿では、コサックの家庭に生まれ父方にサハ人の血が入っていたヴィリュイスク出身のM. N. ジルコフが、ソヴィエト音楽文化建設の時代に合唱団やオーケストラの組織、初めてのサハ語オペラ《ニュルグン・ボートゥル》の作曲といった活動に従事し、彼がサハ音楽史の論考のなかで「初めてのヤクートの専門的作曲家」として記述されていく様相をその背景とともに考察した。ロシア人とサハ人との歴史的背景や政治的攻防は音楽の分野にも影響し、サハ音楽史の論考中にもその片鱗をみることができた。

ロシア人とサハ人との380年にわたる歴史の中で、ヤクーチアにおけるロシア人のあり方は多様である。近年、サハ共和国全体でのロシア人・サハ人の割合は、おおよそ1対1で推移しているが、この比は地域によって異なり、混血も進んでいる。都心部ではサハ語をまったく話せないサハ人の若者がいる一方、数戸のロシア人世帯を除き住民のほとんどがサハ人という地域もある。こうした地域では標識や広告にもすべてサハ語が用いられるが、都市部はすべてロシア語である。

藤原潤子は、革命以前にシベリアに移住したロシア人の子孫グループ「古参ロシア人」とサハ人とが良好な関係を築き、両文化の混合がみられるサハ共和国シンスク村の状況を興味深く報告している。藤原(2012)によると、17世紀から入植してきたロシア人の中には、サハ人の中で暮らすうちに次第にロシア語を忘れ、サハ語を母語とするようになっていった者、自分たちがロシア人であるというアイデンティティさえ失い単に「農民」あるいは「サハ人」と自称するようになった者もあった。サハ語交じりのロシア語、ロシア語交じりのサハ語で話すシンスク村のロシア人は、郡の外に出るとサハ人の中ではロシア人とみなされ、ロシア人の中ではサハ人とみなされるのだという(藤原 2012: 83-84)。

ジルコフとその両親もまた、こうした古参ロシア人といえよう。何代にもわたって土着化した古参ロシア人と新参者のロシア人とは、「われわれのロシア人/よそのロシア人」のように区別される(藤原 2012: 85)。その生涯のほとんどをヤクーチアで過ごし、サハ語を話し、サハ文化に馴染んだジルコフは、「外見はロシア人でも、中身はサハ人だった」ともいわれる。そして今日も、2012年にジルコフの生誕120周年を記念するコンクールや研究会が開かれるなど、人々に顧みられる存在となっている。

20世紀前半、困難な時代を迎えていたロシアの芸術家たちは、数多く他国へ亡命していった。そうした中で、筆者には、ジルコフ自身もまた「ロシアの作曲家」としてではなく「サハの作曲家」としての道のみずからも選択したように思われる。ジルコフの帰郷は、サハ音楽史の文脈においては歓迎されるべきものであり、そこには専門的音楽文化の建設という活躍の場が用意されていた。そこでジルコフの果たした役割は、のちのサハ音楽史の論考中で、専門的音楽文化建設に新参者のロシア人が決定的な役割を果たした他の共和国とヤクーチアとを差別化する要素にもなった。ソヴィエト全土にわたって上から要請された専門的音楽文化の建設において、ヤクーチアではロシアの作曲家ではなく「ヤクートの」作曲家ジルコフが重要な役割を果たした—このような文脈からジルコフとその活動を記述することは、自治共和国から共和国への格上げを目指す政治的背景にも合致していたのである。

付記 ロシア語(キリル文字)からラテン文字への翻字はALA-LC式翻字法を用いた。

## 注

- 1 専門的professional'nyi音楽は、ヨーロッパ音楽evropeiskaia muzykaの言い換え表現としても使われ、この大部分はいわゆる西洋音楽を指していると考えられる。またロシア語iakutskiiは、iakutの形容詞形で「ヤクートの、ヤクート人の」という2つの意味を持つ。iakutはサハ人の他称で歴史的用語でもあるため書名や引用文中では「ヤクート」と訳出するが、地の文ではサハ人の自称を重んじる観点から「サハ」を用いる。
- 2 アレクセーヴァ(1994)は、M. N. ジルコフのことを指して代名詞のように「作曲家 kompozitorは」「作曲家の」といった表現を用いている。ゴロヴネヴァ GOLOVNEVAもジルコフのことをまずは「初めてのヤクートの専門的作曲家」(1991: 10, 64)と位置付けた上で、「民俗学者としてのジルコフ M. Zhirkov- fol'klorist」(1991: 65)「学者としてのジルコフ M. Zhirkov- uchenyi」(1991: 68)といった側面について言及している。
- 3 「サハ化されたロシア人」とは、ロシア語の造語ob'iakutivshiesia russkieの訳語である。これと同じような表現にob'russkivshisia「ロシア化された」があり、「ロシア化されたキルギス人 ob'russkivshisia Kirgiz」のように用いられる。その意味するところは、キルギス語よりもロシア語を使用するほうに慣れているキルギス人といった具合で、おもに言語や文化・風習の面でロシアのほうにより馴染んでいる状態を指す。「サハ化されたロシア人」も、サハ語やサハの文化・風習に馴染んだロシア人という意味になる。
- 4 1926年のヤクーチアの人口は、現在の3分の1以下にあたる28万人ほどで、その81.6%がサハ人、10.4%がロシア人、4.5%がエヴェンキだった(木村 2001: 72)。2002年の国勢調査では、サハ共和国内の総人口は94万9280人で、そのうちサハ人は43万2290人(45.5%)、ロシア人が39万0671人(41.1%)、ウクライナ人が3万4633人(3.6%)、エヴェンキ人1万8232人(1.9%)、エヴェン人1万1657人(1.2%)、タタール人1万768人(1.2%)等となっている。
- 5 1897年のロシア全体での識字率は28.4%で、その後1926年には56.6%、1939年87.4%と推移している(塩川 2004: 237)。
- 6 民衆の家narodnyi domでは、読み書き、政治の基礎知識、音楽理論、ロシア語・サハ語の演劇サークルなどがあった(ALEKSEEVA 1994: 25)。
- 7 G. I. リチンスキーは、ロシア共和国およびチュヴァシ自治共和国の功労芸術家、ヤクート自治共和国およびタタール自治共和国の人民芸術家で、ジルコフの作曲活動を援助した。ジルコフの死後、1955年には、リチンスキーが編曲した《ニユルガン・ポートル》第



2版がヤクーツクの音楽劇場で再演された（ZHIRKOV 1981: 5-6）。

- 8 2012年現在ヴラジオストクでオペラ・バレエ劇場を建設するプロジェクトが進められている。2012年9月ヴラジオストクでのAPEC首脳会議に向けて、ロシア政府は空港の新ターミナル、市内への鉄道線、5つ星ホテル、海洋水族館の建設など50ものプロジェクトを進め、これにオペラ・バレエ劇場の建設も含まれていた。APEC首脳会議は、出席する各国の代表団にロシアの建築技術の高さをアピールする機会とも捉えられていたのである（<http://vladivostok2012.com/show/?id=46734&p=>参照、2013年1月3日アクセス）。オペラ・バレエ劇場を国のステータスと捉える考え方に通じるものがある。
- 9 サハ共和国オペラ・バレエ劇場webサイト<http://opera-balet.ykt.ru/>（2012年9月9日アクセス）

## 参考文献（著者名アルファベット順）

浅村, 卓生

- 2003 「ウズベキスタンにおけるオペラ劇場—ソ連邦期中央アジア文化政策の一側面—」『中央ユーラシアにおける民族文化と歴史像』黒田, 卓; 高倉, 浩樹; 塩谷, 昌史 (編) 東北アジア研究センター叢書第13号: 111-134.

ALEKSEEVA, Galina Grigor'evna

- 1994 *Ot fol'klora do professional'noi muzyki* Yakutsk: Nats.kn.izd-vo Bichik.

FROLOVA-WALKER, Marina

- 1998 "National in form, socialist in content": musical nation-building in the Soviet republics, *Journal of the American musicological society* vol. 51, no. 2 (summer) pp. 331-371.

フォーシス, ジェームス

- 1992 *A history of the peoples of Siberia* London: Cambridge University Press.  
2003 (1998) 日本語訳『シベリア先住民の歴史—ロシアの北方アジア植民地1581-1990』森本, 和男 (訳), 東京: 彩流社.

藤原, 潤子

- 2012 「シベリアのロシア人」『極寒のシベリアに生きる—トナカイと氷と先住民—』高倉, 浩樹 (編著) 東京: 新泉社: 69-88.

GOLOVNEVA, Nina Ivanovna; KIRILLINA, Zoia Innokent'evna

- 1991 *Iakutskaiia muzykal'naia literature* Yakutsk: Iakutskoe knizhnoe izdatel'stvo.

勝木, 英夫

- 2003 「ヤクート人同盟の成立と流刑者のかかわり」『中央ユーラシアにおける民族文化と歴史像』黒田, 卓; 高倉, 浩樹; 塩谷, 昌史 (編) 東北アジア研究センター叢書第13号: 175-186.

木村, 英亮

- 2001 「ヤクート人のサハ共和国 (ヤクーチア)」『東アジア研究』第33号: 71-81.

LEVIN, Theodore Craig

- 1996 *The hundred of fools of God: musical travels in Central Asia (and Queens, New York)* Bloomington: Indiana University Press.

LEVIN, Theodore with Valentina, Suzukei

- 2006 *Where rivers and mountains sing: sound, music, and nomadism in Tuva and beyond* Bloomington: Indiana University Press.

マース, フランシス

- 2006 『ロシア音楽史—《カマーリンスカヤ》から《バービィ・ヤール》まで—』森田, 稔; 梅津, 紀雄; 中田, 朱美 (訳) 東京: 春秋社.

ニコラエフ, ミハイル

- 1994 『新生サハ (ヤクート) 共和国 自由と人間の選択』佐藤, 哲雄 (訳), 東京: 創現社出版.

塩川, 伸明

- 2004 「言語政策」『ロシアを知る事典』川端, 香男里; 佐藤, 経明 (他; 監修) 東京: 平凡社: 236-238.

高倉, 浩樹

- 2000 『社会主義の民族誌—シベリア・トナカイ飼育の風景—』東京: 東京都立大学出版会.  
2004 「1920~1930年代におけるサハの知識人と民族学的研究—ロシア民族学史における断章—」東北大学東北アジア研究センター『東北アジア研究』第9号: 35-56.

東田, 範子

- 1999 「フォークロアからソヴィエト民族文化へ—「カザフ民族音楽」の成立 (1920-1942)」『スラブ研究』46: 1-32.

柚木 (大家), かおり

- 2006 「民族楽器の大量生産—バラライカとソ連の五ヵ年計画—」『東洋音楽研究』第71号: 65-82.

PAVLOVA, Tat'anaVladimirovna

- 2006 *Soiuz kompozitorov Respubliki Sakha (Iakutsiia): Vremia, sobytii, liudi* Iakutsk: NIPK "Sakhapoligrafizdat".  
ウメトバエワ, カリマン UMETBAEVA Kalyiman
- 2011 「20世紀以降のキルギスにおけるコムズの変化」『音楽文化学論集』東京芸術大学、第1号：35-44.  
UTKIN, K. D.
- 1993 *Golosom zhvoi prirody* Iakutsk: kif 〈SITIM〉.  
ZHIRKOV, Mark Nikolaevich
- 1981 *Iakutskaiia narodnaia muzyka*, Sostavitel' G. G. Alekseeva, Iakutsk: Iakutskoe Knizhnoe Izdatel'stvo.

謝辞 本稿は平成23～24年度日本学術振興会特別研究員奨励費（研究課題名「20世紀前半ソヴィエト政権下のサハ（ヤクーチア）における音楽実践と民族音楽」、課題番号：23・11032）の研究成果の一部である。